

「都市を代表させるまつり」についての一考察 —福島県「郡山うねめまつり」を事例として—

橋本 法子・森 幸雄

The festival for symbolizing a city:
in the case of THE UMENE MATSURI, Koriyama.

HASHIMOTO Noriko・MORI Yukio

1 はじめに

都市ではさまざまな祭りやイベントがおこなわれている。ひとつの都市にいくつもの祭りやイベントがあり、それぞれで参加者の範囲や人々の認知度も異なり、なかには地域住民ですら知らないものも少なくない。また、村落の祭礼と同様に相対的に閉じられたコミュニティの集合表象としての祭礼であったり、逆にひじょうな広範囲から多くの人々を集める観光的なイベントであったりもする。

そうしたなかで、本稿でとりあげるのは、他に適当なものがないため「都市を代表させるまつり」という用語でしめすまつりである。それは、対外的に自らの都市のイメージを表明しようとするとともに、市民に対しては都市イメージを共有させ、市民の一体感を持たせるようなものである。そこでは、市民や地縁的な団体の参加が求められる。そうしたまつりは、宗教行事や伝統行事、歴史などを重要なモチーフにするが、むしろまつりが行われることで、新たな伝統が生まれ、歴史が再認識されるようなものも少なくない。神戸の「神戸まつり」や横浜の「開港記念港まつり」、東京の「大東京まつり」、金沢の「百万石まつり」、福岡の「博多ドンタク」あるいは徳島の「阿波踊

り」や高知の「よさこい祭り」など、いくつもの例をあげることができる。これらの知名度の高いまつり以外にもこうしたまつりは多く行われており、ある程度の規模以上の「まち」であれば、そうしたまつりを行っていないほうが珍しいであろう。

本稿はそうした「都市を代表させるまつり（イベント）」を、福島県郡山市を事例として取り上げ、考察しようとするものである。

郡山市は、県庁所在地である福島市より人口が多く、東北第3位の人口規模であり、福島県中通地方の中心都市であるとともに、東北有数の産業都市である。1964（昭和39）年の新産業都市指定を契機に、周辺町村の合併が急速に進み、1965（昭和40）年5月1日、安積郡内の全町村および田村町の5町5村を合併し、人口21万人余の新・郡山市が生まれた。さらに、8月には田村郡内の中田村・西田村を合併している。

この合併を契機として、第1回の「郡山うねめまつり」（以下「うねめまつり」と略記）が開催された。市内にあった采女伝説⁽¹⁾に因み名付けられ、「市民が一体となれるまつりを起こしたい」という意図から始められたまつりである。現在、「うねめまつり」は郡山の都市を代表させるまつりとなっている。

本稿のうち、「うねめまつり」の实地調査や文献調査は橋本が行い、分析と考察は橋本と森とで行った。また、「うねめまつり」の歴史的な事実、主として『福島民報』のバックナンバーの調査による。

2 うねめまつり

本章では1999（平成11）年の第35回「うねめまつり」の实地調査をもとに「うねめまつり」の基本的な構成を把握したい。

表1は第35回「うねめまつり」の主要なイベントを示したものである。他のまつりと同様に、「うねめまつり」でもさまざまな行事やイベントが並行して行われている。そうしたイベントのうち、「うねめ供養祭」、「ミス采女コンテスト」、「うねめ踊り流し」、「ちびっこうねめまつり」の4つが、まつりの中心的なイベントであり、これに付随してさまざまなイベントが加わ

表1 郡山うねめまつりの主要イベント (1999年・第35回)

<p>初日 8月2日 ミスうねめパレード (中央通り～駅前通り～郡山駅 北町角交差点～ちびっこうねめまつり会場) 奈良親善使節団歓迎セレモニー (郡山駅前) うねめ供養祭 (うねめ神社) ご神火リレー (うねめ神社～ちびっこうねめ会場) ちびっこうねめまつり (西部自動車学校)</p>
<p>2日目 8月3日 福祉バザール (中央商店街) '99うねめでSHOW (大町商店街) うねめナイトバザール (大町商店街) ミスうねめパレード (さくら通り～駅前大通り) 新旧ミスうねめ交代式 (駅前大通り) うねめ踊り流し・ひょっとこ踊り (さくら通り～駅前大通り)</p>
<p>3日目 8月4日 福祉バザール, チャリティ・オークション (中央商店街) 氷の彫刻の実演と展示 (ホテルプリシード郡山前) ビアガーデン (中央商店街) 商工会議所青年部物産展 (中央商店街) マーチングバンド in うねめ (さくら通り～駅前大通り) '99うねめでSHOW (大町商店街) うねめナイトバザール 陣屋酔いまつり (すずい駐車場) バルーン&カラオケパフォーマンス大賞 (郡山駅前大通り商店街) うねめ踊り流し・ひょっとこ踊り</p>

り、全体としての「うねめまつり」を構成している。本章では、主要な4つのイベントとそれに付随するイベントのいくつかをやや詳細にみていきたい。

(1) うねめ供養祭

「うねめまつり」は采女伝説に因むまつりであり、まつりの初日に采女に因む行事が行われ、うねめ供養祭がその中心的なイベントとなる。「うねめまつり」は、第1回以来3日間行われているが、2日目・3日目が本来のまつりの日として意識されて、初日は前夜祭と呼ばれることも多い。

うねめ供養祭の会場は、郡山駅から約9km離れた、片平町にある山ノ井公園のうねめ神社であり、采女伝説の発祥の地とされる場所である。

うねめ供養祭そのものは祭壇に点火し、参列者が玉ぐしをあげ、焼香、献花するというシンプルなものである。つづいて、市長、奈良市親善使節団の代表、ミス采女、ミス奈良等が公園内の池に亀を放す行事が行われる。亀の甲羅に願い事を書いて放すと、願い事がかなうとされ、1989年（第25回）からはじまったものである。うねめ供養祭はこれで終わる。

一行が神社を離れ池に向かうと、「ご神火リレー」が始まる。建物の入口に焚かれていた「ご神火」をたいまつに点火し、郡山市商店街青年連合会の3人の男性が市の中心部にある「ちびっこうねめまつり」の会場まで持っていくというものである。うねめ供養祭を終えた一行も「ちびっこうねめまつり」会場へと向かう。

初日の重要なイベントであるが、うねめ供養祭の参列者は市長、市関係者、祭り関係者、ミス采女、片平町関係者などであり、郡山市の一般市民の姿はほとんど見られない。

うねめ供養祭に先立ち、打ち手全員が女性の岩代国郡山采女太鼓保存会の太鼓の演奏が行われた。公園の中央奥の演奏ステージの両側にはテントが設けられた。一つは休憩所、一つは食事所であり、軽食の調理・販売も行っている。太鼓の演奏を見ている人のほとんどが片平町住民であり、顔見知りの者同士が飲み物を分けたり、歓談している姿が見られる。供養祭の最後に、奈良市親善使節団、ミス奈良、ミス采女に花束が贈呈されたが、プレゼンターは片平小学校に通う女の子3人である。供養祭に参加している子どもは彼女たちだけである。

うねめ供養祭は神社で行われ、伝統的な宗教儀式のような印象をあたえるが、うねめまつりの開始にともない、新たに始められたものである。会場として使われる「うねめの宮」は、1973年（第9回）に、郡山市にあった東北歯科大学の理事長の影山四郎が片平町の采女神社内に寄進したものである。「うねめまつり」という名称のよりどころとするため行われ、イベントに歴史性・伝統性を与えるための儀式である。

（2）ミス采女

「ミス采女」はコンテストで選ばれた6人の女性である。うねめ祭り終了

後は、「ミス采女」は「ミス郡山」として他の地域の「ミス」と同様の仕事を行うが、采女伝説にもとづくイベントである「うねめまつり」では欠かせないものである。

「うねめまつり」はミス采女の郡山駅前パレードでスタートする。2日目には、最大のイベントである「うねめ踊り流し」に先立って、ミス采女パレード、新旧ミス采女交代式がおこなわれ、2日目・3日目の「うねめ踊り流し」では踊り流しの最後で参加している。

ミス采女の応募資格は郡山市内に在住、または通勤・通学している高校生を除く18歳以上の未婚の女性となっている。2000年（第36回）から25歳までとされていた年齢の上限がなくなった。このコンテストは、郡山うねめまつり実行委員会と福島民報社が主催し、郡山商工会議所と郡山市観光協会が共催している。

さらに、ミス采女は姉妹都市である奈良市との交流においても重要な役割をはたしている。奈良市でも采女伝説が残されており、毎年仲秋の名月の晩に「采女祭」が猿沢の池で行われている。この采女伝説によるつながりで郡山市と奈良市は1971（昭和46）年、姉妹都市となった。「うねめまつり」には奈良市からミス奈良を含む親善使節団が郡山市を訪れ、「采女祭」には郡山市からミス采女を含む親善使節団が奈良市を訪れ、ミス采女とミス奈良の相互訪問という形で両市の交流が見られている。

（3） うねめ踊り流し

うねめ踊り流しは、2日目と3日目の両日にわたるメインイベントである。国道4号線を車両通行止めにして市内のメインストリートであるさくら通りから駅前大通りを会場におこなわれた。

表2はうねめ踊り流しの参加団体を登場順に示したものである。2日目は、うねめ供養祭で点火されたご神火を先頭に、市長、商工会議所会頭・副会頭、奈良代表、奈良市親善使節団、郡山市議会議員団などのパレードの後、参加団体による踊り流しが始まる。ミスうねめ、片平町とうねめ太鼓で踊り流しは終わりとなる。3日目は自衛隊音楽隊を先頭に、市長、商工会議所会頭・副会頭に続いて、参加団体による踊り流しが始まり、片平町とうねめ太鼓で

表2 うねめ踊り流し参加団体 (1999年・第36回)

<p>2日目 8月3日</p> <p>パトカー (警察署), ご神火 (郡山市商店街青年連合会) 横断幕 (ボーイスカウト), 市長, 会頭・副会頭, 奈良代表 横断幕 (ボーイスカウト), 奈良市親善使節団, 郡山市議会議員団 横断幕 (ボーイスカウト)</p> <p>郡山市職員互助会, (社)郡山青年会議所, 個人参加コーナー, 郡山商工会議所青年部, 郡山市あさかの学園大学学生会, 東日本旅客鉄道 (株)郡山駅, 立正佼成会郡山教会, 郡山信用金庫, <u>自立生活センター</u>, オフィスII, NTT東北移動通信網(株)福島支店, (株)大東銀行, 装道きもの学院, うねめ太鼓, ベルヴィ郡山館, <u>マルチグループ</u>, うねめ太鼓, (株)福島銀行, うねめ太鼓, (株)東邦銀行, <u>高柴ひよっこ連</u>, うねめ太鼓, 郵政こおりやま, <u>石森ひよっこ愛好会</u>, ミスうねめ, 片平町 (うねめ太鼓)</p> <p>3日目 8月4日</p> <p>パトカー (警察署), 先導車, 自衛隊音楽隊, 横断幕 (ボーイスカウト), 市長, 会頭・副会頭, 横断幕 (ボーイスカウト)</p> <p>在日大韓民国居留民団福島県地方本部・アジアナ航空, 東北電力企業グループ, NTTグループ, <u>はまつグループ</u>, 郡山市大町商店街振興組合, 個人参加コーナー, <u>高柴ひよっこ連</u>, ミスうねめ, <u>日立グループ</u>, 片平町 (うねめ太鼓)</p> <p style="text-align: right;">太字・下線付きは, 創作踊り, またはひよっこ踊り</p>

踊り流しは終わりとなる。

表2で注目したいのは、太字で下線が引いてある団体の踊りである。多くの団体が「うねめ踊り」の曲にあわせて踊るのに対して、これらの団体は、創作踊りやひよっこ踊りの団体である。いわゆる正調の「うねめ踊り」と混合しながら、創作踊りやひよっこ踊りが踊られている。

参加団体の内訳をみると、町内会は片平町のみであり、商店街という地縁的組織を合わせても、地縁による団体は2つのみである。参加団体の多くは企業や学校などである。また、「連」とみられる同好者による団体もみられている。さらに、両日とも個人で参加する場が設けられている。

なお、のちに創作踊りの団体が増えてくると、演じる日を別にすべきではないかという意見が生まれてくる。

(4) ちびっこうねめまつり

ちびっこうねめまつりは、1986年(第22回)から始められた、子どもを対象にしたイベントである。会場は第35回(1999年)には自動車教習所の敷地で行われた。ここにはのちに、西部ショッピングセンターが作られるが、同じ場所で続けられている。

会場には親子連れがたくさん見られる。金魚すくい、くじ屋などの遊戯店と、フランクフルト、たこ焼き、焼きそば、串焼き、わたあめ、クレープ、かき氷などの飲食店が出ている。飲み物を販売している店舗にはお茶やジュースの他、大人向けにビールも売られる。アトラクションでは空気で膨らますジャンボ人形やジャンボ滑り台が子どもたちに人気で、長い行列ができる。その他に竹馬コーナー、ミニSL、縄跳び、フリースローなどに挑戦するコーナーが設けられていた。さらにハーレー・ダビットソンに乗っての撮影会も行われた。

駅前での郡山うねめまつりに比べ団体での参加者は少ないが、広い会場に多くの来場者があり、活気のあるイベントとなっている。

(5) さまざまな行事とイベント

上記の主要な4つのイベントの他に、以下のようなイベントが行われる。

うねめまつりの一週間前くらい前から、市内の商店街ではまつりに向けての飾り付けが行われる。踊り流しのメイン会場となる駅前大通りにはちょうちんを飾る看板が立ち並び始めた。

まつりの期間には駅前大通りに直交する中央商店街で福祉バザールが、大町商店街でナイトバザールが行われた。2つの商店街には露店が出てにぎわっており、買い物客には若い世代が多くやって来ていた。また大町商店街では、'99うねめでSHOWが行われている。ライブパフォーマンスや大ビンゴ大会、大型テレビを設置してのテレビゲーム、テレビ番組で行われていたゲームなど、手作り感覚の催しが行われた。

郡山駅前にある郡山最大の飲食店街である陣屋では、陣屋まちづくり協議会の主催で、「陣屋酔いまつり」が行なわれた。これは郡山うねめまつり実行委員会が後援している。駐車場に特設舞台とテントを設置され、舞台上で

は各店がパフォーマンスを見せて楽しませていた。テントでは陣屋の飲食店が出店し、舞台の周りには椅子が置かれており、パフォーマンスを見ながら飲み食いできるようになっている。

第10回（1974年）以来の氷の彫刻の実演と展示も行われている。

うねめ踊り流しに先立って「マーチングバンド in うねめ」が行われ、郡山女子大附属高校、郡山北工業高校の2つマーチングバンド部が参加し、駅前大通りを行進していった

3 郡山うねめまつりの変遷

「うねめまつり」は開始以来、さまざまなイベントが試みられ、取りやめられており、まつりは毎回変化している。このためまつりのどのような性格に注目するかにより、変遷のとらえ方も異なってくる。本稿では市民参加のイベントという点に注目して、市民が一体となれるイベントである「うねめ踊り流し」の変化から「うねめまつり」の変遷を概観したい。うねめ踊り流しは「うねめ踊り」の曲に合わせて踊り歩くイベントである。うねめ踊り流しは第1回から欠かすことなく続けられた行事であり、「うねめまつり」の中軸を担っている行事である。踊り流しは「うねめまつり」のなかで参加者のもっとも多いイベントである。2007年（第41回）では、65団体7,000人が駅前大通りと国道4号を練り歩き、見物人は35万人といわれる。

まつりの性格が変わったのは、1979年の第15回と1994年の第30回のあたりにあり、大きく3つの時期に分けてみることができよう。また「原・うねめまつり」ともいうべき性質を持つ「采女まつり」も重要とおもわれるので、あわせて概観したい。

本章では、「原・うねめまつり」としての「采女まつり」、第1回（1965年）から第15回（1979年）までを第1期、第16回（1980年）から第30回（1994年）までを第2期、第31回（1995年）年以降を第3期としてみていきたい。

（1）原・うねめまつりとしての采女まつり

現在の形になる前に、「原・うねめまつり」とでも言うべき采女伝説をもと

にした「采女まつり」が行われていた。この「原・うねめまつり」も町村合併への気運が高まるなかでの、新しい地域のまつりを意識したものであった。

「うねめまつり」が「市民が一体となれるまつり」を強く意識したのは、1953（昭和28）年の町村合併促進法の公布にあわせて計画していた周辺町村の合併計画が失敗した経験があるからである。1955（昭和30）年までに、富田村、大槻町、高瀬村、中妻村、岩江村などの一部町村を合併するにとどまり、片平町・日和田町・喜久田村は、県の強いすすめがあつたが、住民の反対により合併されなかったのである。

1955（昭和30）年10月に郡山市予定地域のイベントとして始まったのが「采女まつり」である。この「采女まつり」は「市勢発展の上から『采女まつり』を開くことになった」と新聞が伝えており、のちの「うねめまつり」と同様の性格をもつ「原・うねめまつり」というべきものである。

第1回「采女まつり」の市内中心部にある荒池で開催された。湖畔の南側広場に祭壇が設置され、安積国造神社の神主が祝詞をあげる供養祭で幕開けとなった。つづいて、片平町婦人会の約100名の会員が揃いの浴衣で「うねめ踊り」を披露した。スピーカーによる「うねめ節」や「郡山ごぞんしょ節」など身近な唄やうねめの解説が流され続けていた。

池にはうねめ百態が描かれた20艘の燈籠船を浮かべられ、船頭役として市役所職員が乗り込んだ。龍頭を装飾した屋形船には、「うねめ」や数人の「官女」「みこ」が乗り池を一巡する予定だったが、雨のため中止となった。

市内の商店協賛による花火が打ち上げられ、20数艘のボートから小さな花火も打ち上げられた。郡山消防署が協力した水中噴水や東北電力の提供によるサーチライトも照らされ、午後8時過ぎに仕掛け花火で終演した。観衆は1万2千人であったという。

この「采女まつり」は1962年（昭和37年）まで行われたが、資金難を理由に開催が中止されていたこともある。

（2）第1期 第1回（1965年）～第15回（1979年）

1965（昭和40）年に開催された「うねめまつり」が、現在まで続いているものである。「うねめまつり」の開催にあたって、郡山の祭りのうち、「七夕

表3 第1回郡山うねめまつりの行事（1965年）

初日 8月6日	ミスうねめ宣伝パレード（午前9時）
	うねめ前夜祭（午後7時，荒池畔，灯ろう流し・花火大会， 片平町 山の井の清水付近）
2日目 8月7日	うねめ供養祭（午後1時，片平町 山の井の清水付近）
	うねめ聖火リレー（午後4時，片平葛城神社～郡山交通公社前）
	ちょうちん祭り（午後8時，商店街）
3日目 8月8日	市民総踊りパレード（午後1時，旧町村大通り新国道三菱前から市街地）
	ちょうちん祭り（午後8時，商店街）

祭り」「竹供養まつり」などは「うねめまつり」に包括されることになった。もちろん、郡山のすべてのまつりが「うねめまつり」に包括されたわけではない。同時期にはじまった「こどもまつり」は毎年5月5日に開催され、現在まで続いている。勇壮な山車がくり出される、安積国造神社の秋季例大祭も続いている。

第1回「うねめまつり」の概要は表3の通りである。まつりのメインイベントとなった「踊り流し」にあたるイベントが「市民総踊りパレード」という名称であることは注目される。市民総踊りパレードは旧11市町村それぞれから40～50人の団体が参加し街頭を練り歩いたものである。課題踊りは、福島民友社選定の「新郡山音頭」であった。「うねめ踊り流し」は、地域団体ごとの市民参加のイベントとして設定されていたことがうかがえる。

また「うねめまつり」のモチーフとなった采女伝説でつながりをもつ奈良市から市長、観光協会長らの親善使節団が訪れ、返礼に郡山からも奈良采女祭を訪れてもいる。

新郡山市誕生の祝賀行事は7月・8月の2ヶ月にわたり、行事数は43にも及んだ。第1回の「うねめまつり」はこうした祝賀行事の一環という色彩も強い。

以後の「うねめ踊り流し」では、さまざまな新機軸が試みられている。

第9回（1973年）には新曲「うねめばやし」が登場した。新曲をつくるに

あたって歌詞が公募され、「だれでも参加できる踊り」とされたが、「動きがなく」「渋滞し」「ムード盛り上げに欠ける」など不評で、第12回(1976年)には「うねめ踊り」に一本化された。第10回(1974年)には、新中川流という踊りの流派の2人がフラダンススタイルで「うねめ踊り」の音頭に合わせて踊ったりもしている。また、うねめ踊り流しのコースも固定せず、第8回(1972年)では市内主要6会場で行われていた。

また、第11回(1975年)には「ミス采女」コンテストの審査方法が改められている。水着を含む公開審査が市内の寄席で行われていたが、平服のみの非公開審査で行われるようになった。

第14回(1979年)からは、昼間の行事も行われるようになり、こども向けに、金魚すくいやわんぱく市、チビっ子ピンクレディー大会やチビっ子スターものまね大会なども行われた。

(3) 第2期 第16回(1980年)～第30回(1994年)

夏のまつりとしてある程度定着した「うねめまつり」のさまざまな要素が変化していく時期である。特に注目されるのが、うねめ踊り流しについての問題提起の中で、「うねめまつり」の性格が議論されていったことである。性格が次第に明確になり、見せる要素を重視するようになっていく。

きっかけとなったのは、第16回(1980年)に2日目に行われていた開成山公園での踊り流しを中止し、市民盆踊り大会に切り替えるという案が提案されたことであった。⁽²⁾ うねめ踊り流しに毎年三千人の会員を動員してきた、郡山スポーツ民踊協会から提案があったものである。

うねめ踊り流しは駅前-大町-中町の商店街で実施されてきた。しかし、参加する踊り手は各商店や企業の従業員団体ばかりで、企業のPRの場となってしまう、一般市民や観光客が気軽に踊りの輪にとけ込むことができないとの批判があった。市民参加ができる踊り流しは開成山で行われているもののみであった。このため、郡山スポーツ民踊協会内部から「まつりに参加しても、楽しいアイデアもなく面白くない。駅前-さくら通りにコースを変えるなど、新趣向を盛り込むなどする気はないか」の声が高まり、一時は踊り流しのボイコットまで検討されたという。

このままでは「うねめまつり」そのものが開催できなくなるという危機感のなかで、郡山市と郡山商工会議所、郡山スポーツ民踊協会の三者が協議した。その結果、開成山公園での踊り流しを盆踊りに切り替える、商店街での踊り流しには仮装団体も参加させるなどで合意した。開成山公園での踊り流しは、「うねめ踊り」1曲だけでなく、だれでも簡単に踊れる民踊などを織り交ぜ、盆踊りの要素も交えたものになった。しかしながら、第19回(1983年)では開成山公園の踊り流しは取りやめとなり、「踊り流し」は商店街を流すコースのみとなった。開成山公園では代わりにちびっこまつり広場を開催した。

うねめ踊り流しのコースは、この時期しばしば変更されている。大きな変化は、第19回は駅前大通りまでであったが、第20回(1984年)には郡山駅前の広場まで延長され、郡山駅から国道4号線までの駅前大通りを交通止めにしたことである。さらに第26回(1990年)にはコースが変更され、踊り流しのコースは650mから2.7kmと大幅に延長された。さらに第27回(1991年)に前年、参加者があふれたことを受け、スタート地点が変更された。

第15回(1979年)からは、うねめ踊りに参加する個人を対象に、自由な服装を認めた仮装コンクールが始められた。まといプラカードコンクールが団体を対象に行われており、個人と団体を対象にしたコンクールが「まといプラカード・仮装コンクール」として行われるようになった。うねめ踊り参加の団体・個人対象で装飾自動車、仮装、踊り団体の先頭に特色を出した振り付けを審査する装飾コンクールも行われている。

この時期の「うねめ踊り流し」で注目される企画はサンバやひょっとこ踊り導入の試みである。第23回(1987年)からサンバが登場した。郡山JCのメンバーが「うねめ踊り」の音頭から歌詞だけをとってサンバ用に作曲し、若い人も気軽にリズムに乗って参加できるようにと企画したものである。第24回(1988年)にはブラジルから来た10人のサンバチームが「うねめサンバ」に特別参加した。第27回(1991年)にサンバを含んだ「うねめカーニバル」が行なわれたが、第28回(1992年)にサンバはとりやめとなった。第28回ではうねめサンバの代わりにひょっとこ踊りが行われ、以後、現在まで、団体・個人参加を含め継続して踊られている。

さらにこの時期にはうねめまつりを観光資源としようとする動きが強くなった。第26回(1990年)には、実行委員会がJR東日本の各駅や観光協会、県内各商議所、市内の官公庁や商工会などにPR用の大型ポスターを配付している。また、第27回(1991年)には東北三大祭りに対抗できるようにと、メインのうねめ踊り流しの開始時間を1時間繰り上げたりしている。サンバやひょっとこ踊りの導入も観光資源としての魅力づくりという要素があったことは否めないであろう。

(4) 第3期 第31回(1995年)年以降

第3期には、まつりとして定着した「うねめまつり」をより広げるための努力が行われる。観光資源としての魅力づくりという側面とともに、市民参加をいかに具体化させるかという側面でも行われた。

うねめ踊り流しは第30回から、2日目・3日目の両日開催となった。さらに第31回(1995年)からは踊り流しの会場の充実がなされた。「うねめ踊り流し」の開催される両日とも、国道4号に交通規制がされ車両が全面通行止めになった。踊り流しは、それまでもさくら通りと駅前大通りを使って行われていたが、これまでは国道4号の横断時には、踊りを中断して駆け足で渡り終え、再び踊り始めるというやり方であった。「あさか野バイパス」の整備により、国道4号の交通量が減少したため、可能となったが、うねめ踊り流しが国道を止めたということで関心を集めた。

新たな踊りである「ひょっとこ踊り」が踊り流しに登場し、定着した。「ひょっとこ踊り」が登場するきっかけは、1991年に行われた講習会であった。郷土芸能を地域おこしとムラづくりに役立てようと開催された「ひょっとこ踊り」の講習会は、「うねめまつり」の踊り流しに大挙して参加するために特訓も兼ねていた。「ひょっとこ踊り」は江戸時代から郡山市西田町高柴に伝わる「高柴七福神踊り」の1つで、小正月に、五穀豊穡を願い、顔の上半分の面をかぶり町内の各軒を踊り回るものである。郡山市指定重要無形民俗文化財となっている。この踊りは決まった形にこだわらず、即興でそれぞれのひょっとこを体全体で表現し、周囲を誘い込んで楽しませ、めでたい気持ちにさせればよいというものであった。市民が参加しやすい踊りとして

注目された理由はここになる。

第36回（1998年）から実施された「Ma・Zasse(まざっせ)踊り」は企業や団体参加が中心であったまつりに、市民を参加させるための新企画として、郡山商工会議所青年部が提案したものである。「Ma・Zasse(まざっせ)踊り」は各地で実施されているよさこい踊り風の踊りである。第36回（1998年）の初日に行われた「Ma・Zasse(まざっせ)踊り」には26団体が参加した。いずれも企業団体ではなく市民団体であり、参加者は幼児から60代ぐらいまでと幅広かった。「Ma・Zasse(まざっせ)」というのは郡山地方の方言で「まざりなさい」といった意味で、市民への呼びかけを含んでいる。

ただし、各地のよさこい踊りグループの場合と同様に、いくつかの踊りのグループは事前に十分な練習をおこない、見物者にみせることを意識したものとなり、市民参加をどのように考えるのかが問われている。

市民が参加しやすいイベントとして第38回（2002年）から始まったのが「ゆかたDEうねめ」である。まつりに参加した市民の浴衣姿のコンテストで、夏祭りらしい企画として関心を持たれている。

4 まとめ

（1）参加団体の変化

「うねめまつり」は合併により拡大した郡山市の一体感づくりを目的で始められたため、当初、まつりへの参加は町内会などの地縁的集団が基本となっていた。

1965年の第1回「うねめまつり」では、市民総踊りパレードと称して行われた踊り流しは、新しく郡山市の仲間入りをした11地域が参加している。以後、第8回（1972年）までは20団体以上の町内会や青年団などの地縁的団体が参加している。第9回、第10回は町内会の参加が10団体未満と少なくなるが、第11回（1975年）には町内会の参加数が21団体に回復している。第12回（1976年）から第21回（1986年）までは町内会の10団体程度の参加していたが、第22回（1987年）から急激に減少し、2～4地域の町内会が参加するだけになり、現在までその傾向は続いている。

町内会の参加が減少しても、全体としての参加団体は減少していない。地域団体に代わって企業団体の参加が増加したからである。企業団体はそろいの法被や浴衣をまとった多数の従業員が参加し、踊り流しの華やかさを増すようになった。企業団体に比べて、町内会などの地縁団体での参加は、費用の負担と参加人数の確保という点からより困難となっていった。

そこで、地縁的団体である商店街が、地縁集団のなかでの重みを増していった。「うねめまつり」ではまつりの会場となる駅前周辺の商店街だけではなく、まつりの会場ではない地域の商店街も参加している。商店街が経済的利益のためだけにまつりに参加しているのではなく、地域の一員として地域のまつりである「うねめまつり」に参加していることをしめしている。

同様に、銀行や信用金庫などの地元金融機関も、地域の代表機関という性格を強く持つようになったことも注目される。「うねめまつり」に参加している銀行員は「地域サービスの一環として参加している」と答えており、地縁的なつながりのなかで積極的な参加をしていることがわかる。松平誠が調査した高円寺の阿波踊り⁽³⁾では金融機関の連は、地元サービスとPRが目的の「サービスの連」と記されているが、「うねめまつり」においても、他の業種とは違う特徴を持つと思われる。

さらに市役所、商工会議所、青年会議所などの公的組織・団体の地元性もより強調されるようになっている。

(2) 地域ぐるみのコミットメントが強まる片平町

「うねめまつり」に対しては、地域社会のかかわりが全市的には弱くなるなか、片平町だけは采女まつりへの地域的コミットメントは強まっている。采女伝説の発祥の地である片平町では、第1回から現在まで欠かすことなくうねめ踊り流しに多くの住民が参加している。

1994年(第30回)には、片平町に誕生した女性だけの和太鼓集団「岩代國郡山うねめ太鼓」はうねめ供養祭と2日目、3日目のイベントで太鼓の演奏を初披露している。この年、片平町のうねめ実行委員会が市制70周年、うねめまつり30周年、地元のうねめ太鼓創設などを記念して「采女伝説発祥地としてまつりを盛り上げなくては」と踊り流しへの参加を町内住民に呼

びかけた。「踊り手」と「一般参加者」の2つのスタイルでの参加者を中学生以上の女性を対象にして募集した。踊り手は実行委員会で用意したそろいの浴衣で踊り、一般参加者は新たにつくられた3000個の土鈴を手に持って踊りに加わる。また、装飾山車の上に乗る「采女おどり」の曲に合わせて手招きする「お囃子」も小学1、2年生の女子を対象に30人募集した。まつりの当日は送迎バス23台、約800人が踊り流しに参加している。このように、ほかの地域ではみられない行動がみられる。

このため、「うねめまつり」を片平町のまつりとの意見が表明されることもある。中止された花火大会の再開を求める市会議員が、「片平はうねめまつりがあるからあれだけど、旧市内は特に今ないわけですよね」⁽⁴⁾と発言している。采女伝説の「うねめまつり」は片平町のまつりという発言がでるほど、他の地域からみて片平町のコミットメントは強い。

(3) 地域性のアピールと市民参加

「うねめまつり」は、観光としての側面を意識しながらも、「市民が一体となる」ことを強く意識しているため、市民が関心をもつものを「貪欲に」受け入れていくという特徴をもっている。

例えば、2007年(第43回)には東北を拠点とするプロ野球チームの楽天イーグルスのファーム選手が「うねめ踊り流し」にユニホーム姿で参加したが、市民の関心を呼ぶものであれば認めている。Jリーグ開幕に沸いたサッカーブームの時には祭りの中でJリーグ誘致の署名活動が行われたり、雲仙普賢岳災害時には祭りの売り上げから義援金を出したりもしている。こうした時事的な出来事への対応も市民の関心を集めるための重要な仕掛けとなっている。

また、第1回から行われている中心的なイベントである「うねめ踊り流し」でも、さまざま工夫をしている。サンバ・カーニバルが全国的に盛り上がっている時期にはサンバの踊りを取り入れ、現在のようによさこい踊りが全国的に広がっているときにはよさこい風の「Ma・Zasse踊り」が行われている。さらにしばしばコースの変更も行ない市民の関心に応えようとしている。

観光としてのまつりや市民参加のためのまつりに特化したイベントや、伝統的なまつりに比べて、「市を代表させるまつり」は時代の影響を強くうけた流行現象もふくむ、風俗的なイベントも組み込み、絶えず変化しながら祭りが続けられている。

(4) 行政とのかかわり

ここでみた「うねめまつり」のような「都市を代表させるまつり」は行政主導のまつりとしての性質を強く持っている。行政主導であるがゆえに、他の地域諸団体や市民との協同を強く意識した実行委員会方式の運営となることが多い。「うねめまつり」の運営も、実行委員会方式で行われている。実行委員会は毎年組織されるもので、市役所・商工会議所・商店街（郡山市商店連合会）・婦人会・各種文化・芸能団体など多くの団体・組織が構成メンバーとなっており、幅広い市民によるイベントという性格を強めている。

また、行政主導であるから祭りの運営過程での市民参加の可能性が高くなるのも特徴の1つである。まつりの終了後行われる検討会議ではさまざま意見が出され、改善の検討が行われている⁽⁵⁾。何回も行われている祭りでありながら、主催者はむろんのこと、特定の組織や個人が決定権を持っていない。「市を代表させるまつり」であるからこそ市民や団体がさまざまな形式で参加できる可能性を残し、認めているまつりであるといえる。

しかしながら、行政主導であることは、行政の意志が反映しやすいことである点にも十分に注意する必要がある。新幹線の開業や高校総体開催などの行政の関心事が、まつりでのイベントを変化させる要因となる。2004年には周辺の観光行事の日程を考慮して、観光客誘致のために、「うねめまつり」の開催が8月2日・3日・4日から8月の第1金曜・土曜・日曜に改められたりもしている。

また、行政からの要望ということで、伝統的な行事の改変や新たな要素の追加が容易に行われ、地域の伝統や民俗が変えられる可能性も大きくなる。たとえば、小正月の行事であった「ひょっとこ踊り」が「うねめまつり」のために夏にも行われるようになった。「うねめまつり」により「七夕祭り」「竹供養まつり」といった行事は消えてしまったのである。さらに、まつり

のなかでつくられた行事が、過去のある歴史を反映すると思わせてしまうこともある。采女伝説という地域の伝承が、祭礼的な行事を通して、具体的な形態で地域に固定する可能性も存在している。

本稿でとりあげた「うねめまつり」は東北五大まつりに数えられることもあるほどの知名度のあるまつりであり、「市を代表させるまつり」の中では成功しているまつりである。そのため、他の地域の「市を代表するまつり」に比べ、資料も得やすいと思われた。それでも、50年に満たない歴史について調べるのは容易ではなかった。

「市を代表させるまつり」にはあまり成功しているとは言えないが、続けられているものが少なくない。これらは十分に研究されていない。しかしながら、そうしたまつりのなかに、地域性を十分に考慮しながら、都市の現状を理解し、住民のもつ都市のイメージを抽出するための重要な手がかりがあると思える。

注

- (1) 采女伝説とは、以下のようなものとして地元の小学校の副教材などで紹介されている。奈良時代に冷害が続く安積の里（現・郡山市）を訪れた巡察使葛城王は、里長の娘、春姫を見そめ、春姫を帝の采女として献上することを条件に、貢物を三年間免除することになった。春姫には、次郎という許嫁があったが、都へのぼった。春姫は、帝の御寵愛を受けていたが、仲秋の名月の日、次郎恋しさに猿沢の池畔の柳に衣をかけ、入水したように見せ、次郎の待つ安積へ向かった。里へたどりついた春姫は、次郎の死を知り、雪の降る夜、あとを追って次郎と同じ山の井の清水に身を投じた。やがて春が訪れ、山の井の清水のまわり一面に名も知れぬ薄紫の美しい可憐な花が咲き乱れていた。二人の永遠の愛が地下で結ばれ、この花になったのだと噂をした。この花は「安積の花かつみ（ヒメシャガ）」となったという。
- (2) 『河北新報』1980年6月11日
- (3) 松平誠「東日本における阿波踊りの新展開」『生活学論叢』創刊号、1995年、日本生活学会
- (4) 郡山市議会 平成16年6月定例会 環境経済常任委員会
- (5) 2007年の検討会議は「参加者は市、商工会議所、マスコミ各社、商店街、踊りの出場団体、協力団体などの代表約20人。会議では、『踊り流しがあまりにゆったりしていて、特に若者が参加しにくいのではないか』『踊る時間が長過ぎる』『踊る場所が暗い』などの意見が相次いだ」という。『福島民報』2007年10月3日。